明治維新のうねりと呼応するように様々な改革運動が起きた。明治元年、深川栄左衛門、百田多兵衛ら改革派は、窯焼きが赤絵屋まで営業できるように主張し、赤絵屋の名代札（営業札）や輸出鑑札の規制緩和について新政府に要求している。

この結果、深川栄左衛門、手塚亀之助、辻常明（勝蔵）、深海墨之の４人は増大する輸出需要やフィラデルフィア万博に対応するため、明治８年（1875 年）、合本組織香蘭社を設立した。

この会社は、

① 日本陶器会社の先駆的存在となり、美術的な磁器を製作、輸出

② 西洋の磁器機械を日本で最初に導入

③ 陶磁器を製造する者への融資を目的とした有田貯蔵会社を設立

八代 深川栄左衛門

④ 万博や展示会に多く出品、入賞

を果たし、有田の名を世界に広めた。

栄左衛門は幕末の改革意識を明治に開花させ、明治前半の有田をリードした進取の気性に富む人であった。明治２２年、５７歳で死去。長男の与太郎が九代栄左衛門を襲名し、香蘭社を引き継ぎ、次男忠次が後に分家し、明治２７年、深川製磁株式会社を設立している。深川一族に深川六助がいる。有田町議、西松浦郡議、佐賀県議を歴任し、泉山磁石場の改修事業に尽力。皿山きってのアイデアマンと称され、「有田陶器市」の発案、「陶祖李参平碑」の建設を提案し、有田の振興に貢献している。

●実業教育の草分け　如心・江越礼太

文政１０年（1827 年）、佐賀県小城郡に生まれた、旧小城藩士。江戸に出て昌平坂学問所で学んだ。白川の地に、わが国初の陶磁器工業学校「勉修学舎」が開校したのは明治１４年（1881 年）。そのとき校長として経営に当たったのが江越礼太。有田が他所より早く焼き物の専修学校を開いたことは勿論、特筆すべきことは、その建学の精神にあり、今日の教育改革に示唆を与えたことが光っている。

如心・江越礼太

設立の目的は、有田焼の次代を担う若者の教育にあたって。有田がとかく伝統に寄りかかり、有田焼固有の美を失いつつある実情を鋭く指摘。

「安易さから脱するには、西洋の技や教えに学び、その長を取り、わが不足を補うことによって名工を育成する必要がある」と説いている。窯業技術の普及化を主張し、その先見性と洞察力は「有田百年の大計」として今日まで脈々と引き継がれている。明治２５年、６５歳で他界。

没後、明治２６年有田徒弟学校、明治３３年、佐賀県工業学校有田分校、そして明治３６年、有田工業学校に昇格。今日の有田工業高校へとつながっている。昭和６０年に創設された佐賀県立有田窯業大学校も、この精神に基づいている。（今年、芸術デザイン学部が国立佐賀大学へと移行のニュースがあった）

●おわりに

幕末・明治の有田における先人たちのパワーとエネルギーは歴史の試練にさらされながら今日、逞しく成長・発展を続けている。人間国宝十三代柿右衛門（1982 年７５歳没）は「有田の生きる道は」と問われたとき、次のように語っている。名言と言えないだろうか。

「将来、有田が焼き物の町として安定する道は、根本的には有田として独特のものを作ること。特別の高級品でなくても、『なる程これは良いな、やはりこれが有田だ』という特徴のあるものを作ることが必要である。とんでもない美術品をうんと作れという意味ではない。中途半端な美術品よりも美術品としてきちんと体裁を備えたものを作り、有田の名を落とさぬこと」と。

４００年という長い歴史・文化を振り返り想うことは、佐賀の有田は、世界に誇る陶都であり、多くの貴重な遺産を踏まえて今も進化し続けている。（今年、「日本磁器のふるさと肥前」が文化庁の日本遺産に認定された）先人たちの磁器にかける情熱と挑戦してやまない気概に感謝しつつ筆を擱く。

平成２８年７月

有田・内山の氏神「陶山神社」～磁器製の大鳥居